

今回は、2月4日に行われました口腔顔面痛エキスパートセミナーについて日野市立病院の池田浩子先生に、報告していただきます。

## 口腔顔面痛エキスパートセミナー参加報告

日野市立病院顎関節症・口腔顔面痛外来 静岡市立清水病院顎関節症外来  
国際医療福祉大学三田病院顎関節症・口腔顔面痛外来 池田 浩子

口腔顔面痛エキスパートセミナーが2018年2月4日(日)、慶應義塾大学病院2号館11階大会議室にて開催された。セミナーの冒頭、企画運営委員長の村岡渡講師より本セミナーのプログラムの解説が行われ、今回のセミナーの講師の先生方が紹介された。今回のセミナーの講師陣は飯田崇先生(日本大学松戸歯学部)、井川雅子先生(静岡市立清水病院)、石垣尚一先生(大阪大学)、今村佳樹先生(日本大学歯学部)、西須大徳先生(愛知医科大学)、佐藤仁先生(昭和大学)、築山能大先生(九州大学)、野間昇先生(日本大学歯学部)、福田謙一先生(東京歯科大学)、村岡渡先生(川崎市立井田病院)、和嶋浩一先生(慶應義塾大学)(五十音順)という豪華なラインナップであった。



会場風景

受講者はA~E班(1班4名ずつ)の5グループに分かれ、各グループに2人ずつ担当講師が付くという受講者にとって大変恵まれた環境で行われた。午前の部はまず受講者の理解レベルを確認するためのプレテストから始められた。プレテストは選択式の計8問で三叉神経痛、頭痛の分類、三叉神経・自律神経性頭痛の特徴、神経障害性疼痛の診断・治療に関するもの、アミトリプチリンやプレガバリンなどの薬物療法についてなど多岐にわたった項目から出題され、受講前に自分が理解できている点、理解できていない点を確認することが出来た。

プレテストの後、西須講師から午前の部の臨床診断推論実習の症例提示が行われた。現段階では症例提示のみで、実際に臨床診断推論作業を行う前に、「国際頭痛分類(ICHD-3β)におけるTrigeminal Neuralgia」について野間講師から、「非歯原性歯痛の診断に必要な頭痛の知識(三叉神経・自律神経性頭痛を中心に)」について井川講師から解説が行われた。

「国際頭痛分類(ICHD-3β)におけるTrigeminal Neuralgia」では三叉神経痛の分類、その他の有痛性三叉神経痛ニューロパチーについての解説、また二次性頭痛を疑うRED FLAG(危険な痛み)についての解説もあった。また先日発表されたICHD3で三叉神経痛の分類に変更があったため、その要点も付け加えられた。「非歯原性歯痛の診断に必要な頭痛の知識(三叉神経・自律神経性頭痛を中心に)」では三叉神経・自律神経性頭痛の各診断基準や特徴などの解説が行われた。会場からは発作性片側頭痛や持続性片側頭痛の治療薬であるインドメタシンの使い方などの質問があった。

続いてグループごとに各講師の指導のもと、臨床診断推論実習が行われた。グループごとに進行役と発表役が決められ、進行役のリードで実習が進められた。まずステップ1として追加の医療面接・構造化問診をインストラクターに行い、追加された情報も含めキーワードを抽出し医学用語に置き換えた。ステップ2ではその医学用

語から鑑別診断を挙げ、ステップ3においては鑑別診断に対する確認作業として検査の結果や追加の問診などインストラクターに行い、必要なデータの提示を受けた上で予備診断を行った。ステップ4として予備診断の見直し作業の後、確定のための追加の問診・検査をすすめ、最終診断をつけるというワークショップ形式で行われた。午前の部の症例の主訴は「左側上顎の痛み」と「側頭部の頭痛」であり、時間は40分であったが、どのグループからも多くの鑑別疾患があげられ活発に討論が行われていた。その後各グループの発表役の受講生から各グループ内でどのような討議が行われたかを発表後、最終診断名がグループごとに提示された。最後に西須講師から、本症例における臨床診断推論についての解説があった。また午前の部の最後で国際頭痛分類第3版が先日発表された事を受け、今村講師より3β版からの変更点などについて解説が行われた。

午後の部はまず村岡講師から臨床診断推論実習の症例提示が行われた。ここでもすぐに推論に入るのではなく、症例の提示のみ行われた後、野間講師より「定量感覚検査の解釈と神経障害性疼痛の診断」として、神経障害性疼痛診断アルゴリズム（国際疼痛学会による）の解説の後、定性感覚検査、定量感覚検査について症例提示も含めた詳説があった。世界的に感覚検査の標準になりつつある「German Research Network」における定量的感覚検査のプロトコールも解説された。その後、和嶋講師より「神経障害性疼痛の薬物療法の各種ガイドラインの解説」が行われた。その中でまず神経障害性疼痛薬物療法にあたっては、使用する薬物の添付文書を熟読する重要性、また各種ガイドラインを参考に治療戦略を立てる必要性が述べられ、国際疼痛学会（IASP）、英国国立医療技術評価機構（NICE）、日本ペインクリニック学会が提唱しているそれぞれの神経障害性疼痛ガイドラインの説明が行われた。また別冊資料として口腔顔面痛の治療に使われる主な18種類の薬剤の添付文書集が配布され、各々の薬について临床上必要な留意点を、ポイントをしばって分かり易く解説して頂いた。その後、本日2回目の臨床診断推論実習が行われた。今回は午前の部の内容に追加し治療計画の立案まで行うこととされた。午後の症例の主訴は「右上の歯が痛い」「右側で物を咬むことができない」であり、今回も多くの臨床診断があげられていた。



薬物療法の解説を行っている和嶋講師

患者が複数の既往歴を有していたことから、治療法の立案において薬剤の選択、用法、用量に制限があったため、治療戦略の立て方に工夫が必要であったが、受講者は午後の講義の内容を参考にしながら治療方針を立てていた。大変実践的な内容であり、口腔顔面痛を学ぶ醍醐味が経験出来たように感じた。

セミナーの最後は、質疑応答、総合ディスカッションとポストテストが行われた。ポストテストによって本日の講義の内容を再確認出来たように思う。

今回のセミナーはエキスパートセミナーという名目で行われたが、初級に相当する口腔顔面痛ベーシックセミナーを受講していなくても参加できるように、講義も総論を交えた充実した内容であり、明日からの臨床にすぐに役立つ内容が満載であったように思われた。臨床診断実習はやり慣れていないと多少敷居が高いように感じるかもしれないが、「左側上顎の痛み」、「側頭部の頭痛」、「右上の歯が痛い」、「右側で物を咬むことができない」など普段よく患者から言われる主訴から他の先生はどのように問診、検査を追加し診断をつけているのか視野を広げられる貴重な機会だと思われた。インストラクターも口腔顔面痛に精通した講師陣から構成されており、普段なかなかざっくばらんにお話する機会がない先生方と臨床診断推論実習の中で直接色々質問しながら行えるとても貴重な機会だと思われた。一筋縄ではいかない難しい症例においては、自分だけでなく口腔顔面痛に携わっている先生方皆さまが試行錯誤しながら日々の臨床を頑張っているのだと少し勇気づけられたセミナーでもあった。診断に迷った経験をお持ち（おそらくほとんどの先生方が含まれると思われるが）の先生は、是非一度臨床推論実習を含めた本セミナーに参加してみることをお勧めしたい。エキスパートセミナーを受けて「口腔顔面痛の名探偵」になりましょう！

---

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: [jsop-service@onebridge.co.jp](mailto:jsop-service@onebridge.co.jp)